

久内氏ノ記事ヲ讀ミテ

SECK ET VALETTE ノ Code ニ照スト其赤褐色 Rouge-orange No. 78 D ニ相當スル色ガ現ハレル、特ニ僞ルベカラザル差違ハ中軸 Central (Chondroidal) axis ガ殆ンド管狀ヲナシ中央ハ僅少ノ菌絲ガ蜘蛛巢狀ヲナシテ居ルコトデアル、ざるをがせ屬ノ中軸ガ空洞デアルト云フコトハ普通ノ書物ニハナイコトデアルノデ自分ノ標本ヲ全部ヨク檢ベテ見ルト須走産ニ一ツ箱根蘆湯産ニ一ツ又牧野先生ヨリ得タ標本中今カラ二十六年前片山義夫氏ガ備前兒島郡デ探ッタ品デ Usnea barbata Fr. var. scabrosa (Ach.) ト銘打ッタモノガ亦此種デアルコトガ分リ又故安田篤君ノ標本中松田英二君ガ臺灣阿猴(今ハ屏東)デ探ッタ Usnea creberima WAINIO ト命名サレタモノガ亦同一品デアル此ノ Usnea creberima ハ前ノ Usnea roseola ト同ジク故安田君ガ送ッタ陸前産ノ品ニツキ WAINIO 氏ノ設定シタモノデ其ノ記載ハ今問題ノ種ニヨクアテハマリ髓層ハ帶黃紅色 ochraceo-roseus トアリ然シ管狀ノ中軸ニツキテハ何トモ言ッテ居ラヌ多分氣ガ付カナカッタデアロウ、ソコデ予ハ之ヲ奥國ウキーンノツァールブルックナー氏ニ送り其鑑定ヲ受ケタ所

Usnea Bailayi A. ZAHLEB. (Eumitria Bailayi SHINK.) f. endochrocea A. ZAHLEB. nov. form.
ナル學名ヲ得タ、和名ハ其管狀軸ニ因ンデうつゝひげこけト命名スル

○久内氏ノ記事ヲ讀シテ

理學博士 中井猛之進

本誌第三卷ノ第八號デ久内清孝氏ハ『Penstemon カ將タ Penstemon カ』ノ題下デ Penstemon ノ屬名ノ書キ方ニ就キ記サレテ居ルガ此 Penstemon ハ矢張 Penstemon デ Penstemon ト改訂スル必要ハナイト私モ考ヘマス、萬國命名規約ニ依ンベ 1753 年版ノ LINNAEUS 氏ノ Species Plantarum 第一版以降ノ學名ヲ學名トスルコトニナツテ居マス、同氏ハ Penstemon ハ Chelone 屬ト同一ト考ヘ Chelone Penstemon ト命ジテ

上ノ Species Plantarum ノ 612 頁ニ出シテ居マス、同書第二版 1762 年版ノ 850 頁ニモ同様ニ出テ居マシタ
 異名トシテ Pentstemon MICHX. gen. 14. トアリマス是ノミチCHELL 氏ノ Nova Physico-Medica Academiae
 Naturae Curiosorum, VIII. Appendix ニ植物ノ新屬ヲ書キ其中ノ 214 頁ニ新屬 Pentstemon ヲ記シテ居ルハ
 ハンドモ後人ハ概テ Pentstemon トシテ居ナイ僅カニ David Don ガ Edinburgh, New Philosophical Journal,
 XIX. p. 113 (1835) ニ Pentstemon ト記シタケデアル其他ノ植物學者ハ假令 ADANSON ノ Familles des
 Plantes ノ Table p. 589. ニ Pentstemon MICHX. v. Chelone トシテ居ル是ハ 1763 年デアル其後ハ 1784 年
 MURRAY ノ Systema Vegetabilium ニ至ル迄ハ皆 Chelone Pentstemon 出テ居ル、1789 年 JUSTEU ノ
 Genera Plantarum ニハ Chelone ノ異名トシテ Pentstemon トシテ居ルガ是ハ誤記デアル而シテ Pentstemon
 ヲ Chelone ヲリ分チテ MITCHELL 同様獨立ノ屬ニ改メタノハ 1791 年 SCHREBER ノ Genera Plantarum, p.
 808, no. 1753 デアル其時ニモ Pentstemon ト記シテアル、既ニ文法上カラハ Pentstemon ガ正シト LINNAEUS
 ノ Species Plantarum 第一版以降皆 Pentstemon ヲ用キ BAILEY ノ言フ如キ Pentstemon ハ 1762 年ニ非ズ
 シテ 1835 年ニナツテ出タノデアルカラ其様ナ名ヲ用キル必要ハナイ、BATSCH 氏ノ如キハ 1802 年其著 Tabula
 affinitatum regni vegetabilis, p. 193 ニ Pentstemon トサヘ記シテ居ル位デアル

次ニ又久内氏ハ同ジク本誌第七號ニ於テ『杉本順一氏ノ雜誌『植物界』ヲ讀ミテ』ト題シ杉本順一君ノ雜誌
 『植物界』ニ就イテノ極メテ穩和ナ御批評ヲ拜見シマシタガ至極同感デアリマス、元來植物ノ學名ヲ定メルコ
 トハ單ニ實地ニ植物ヲ見テ相違ヲ發見シタ(主觀的ナラズトモ)丈ケデハ出來ナイ其相違ガ判ツテカラソレカ
 ラ先キガ大變ナノデアル、即チ古今東西幾多ノ參考書、論文ニ當ツテ見テ今迄ニ其物又ハ其レニ類似ノモノガ
 書イテナカッタカラ見定メ比較スベキ標本トモ照合シテカラ後始メテ確定サル、ノデ其間實ニ非常ナ手數ヲ要
 スル又標本ヤ圖書ノ完備シテ居ル處デナクテハトモ出來ナイ仕事デアル、能ク東京植物學會(地方ノ會員カ

久内氏ノ記事ヲ讀ミテ

ラ新植物ノ記事ヲ送ツテ來ルケレドモ其等ノ人々ハ從來『植物名鑑』ニナカッタトカ『植物學雜誌』ニナカッタトカ『大日本樹木誌』ニナカッタトカ云フ簡單ナ小兒ノ様ナ考デ論文ノ眞似ヲ書クノデ斯種ノモノハ學會デハ常ニ沒書シテ居ル、杉本君ノ如キモ熱心ハ久内氏ト共ニ賞讃シタイケレドモ個人トシテ所要ノ圖書(少クモ二十萬圓以上ハカ、ル)ト多數ノ比較スベキ標本トヲ有シテ居ナイコトハ明カデアルソレニモ拘ハラズ斯ル出版物ヲ敢テ刊行シテ専門學者ニ迄購讀ヲ勸メルトハ實ニ暴舉トモ盲蛇トモ沙汰ノ限リト謂ハザルヲ得ナイ

次ニ斯イフ人ガ一度敢テ書タトナラバ其研究材料タル標本ヲ權威アル研究所ニ送ツテ鑑定シテ貰ハナケレバ折角發表シタモノモ後ニハ誰モ用キテ呉レル人ハナク、ツマリ出シタ丈ケノ事デ其努力ハ永久ニ消エテシマウノデアル恰モ暖簾ニ腕押シヲスルト一般デ御苦勞様ナコトデアル其レ故不幸發表シタノナラ其材料ヲ東京又ハ京都ノ帝大植物學教室ノ如キ權威アル研究所ニ送ツテ専門家ニ見テ貰ヒ其中デ何々ガ生キ殘ルカラ定メナケレバナラヌ、斯界ニ多クノ混雜ヲ惹キ起シ云々ハ其レカラ後ノ問題デアツテ單ニ出版物が出タ丈ケデハ専門家ハ一顧モシナイカラ學界ニ妨害ニモ亦益ニモナラナイ、テンデ問題ニハナラナイ、私ハ友人某ガ『植物界』ノ何物カラ知ラズシテ購求シ之ヲ私ニ見セテ批評ヲ需メタ時一覽シテ杉本君ノ大膽無謀ニ驚イタノデアルガ其中ニ一ツ記憶ニ殘ッテ居ルノハ富士あぢみヲ新屬 *Erythrolaena* ニシタコトデアル然シ *Erythrolaena* ト云フ屬ハ杉本君ノ發表ニ先ダツ丁度一百年即チ西曆千八百二十五年ニ英人 Sweet ガ其著 *British Flower Garden*, t. 134. デ今云フ *Cirsium conspicuum* Schult.-Bri. 屬 *Erythrolaena conspicua* ト命ジテ圖解シタ時ニ建テタ屬デアル Maximowicz 氏ニ之ヲ *Oniscus* 屬ノ亞屬ニ下シ *Mélanges Biologiques* 第九卷三百〇四頁(杉本君ノ記ス如ク第四卷ニ非ラズ)ニ富士あぢみヲ *Oniscus purpuratus* ト命名記述シタ時ニ記シテ居ル、私ハ東京『植物學雜誌』第二十六卷ノ歐文欄ニ日本產ノあぢみ屬ノ分類ヲ書イタ時ニハ其第二百五十五頁ニ *Cirsium Subgen. I. Erythrolaena* (Sweet) C.H. Schultz. ト記シテ置イタカラ杉本君モ之ヲ見タラ Sweet 氏ガ既ニ何カ書イテ居

タカ位ハ想像ガ附ク筈デアル、又 MAXIMOWICZ 氏ガ富士あぢみヲ書イタ時ニモ *Cnicus* Subgen. *Erythrolaena* ノ異名ニ Gen. *Erythrolaena* SWEET. ト記シテ居ルカラ杉本君ガ *Mélanges Biologiques* スラ見テ居ナイコトガ判カル其他ソレ以下ノ種類ニ至ッテハ批評ノ限リデナイ

序デアルカラ一言シテ置キタイ、地方ニ斯イフ天狗ガ少クナイ獨リ天狗ニナルノハ稚氣ガアツテ愛スベキデアルガ久シク専門家ニ教ヲ乞フタ上句少シ植物ノ名ヲ知ツテ來ルト直ニ天狗ニナツテ今度ハ却テ其教ヲ受ケタ恩人迄モ批評スル人ガ澤山アル、私ニモ十七八年前吉野善介ト云フ人カラ「常ニ牧野氏ニ依頼シテ居タケレドモ容易ニ回答シテ呉レスカラ宜シク頼ム」ト云フ意ノ手紙ト共ニ標本ヲ送ツテ來タ其時ハ其標本ガ少數デモアリ私モ植物ヲ研究シ始メテ未ダ年ヲ經テ居ナカッタ時故餘リ多忙デモナカッタカラ其レヲ快諾シテ返事ヲシテ居タ然ルニ一旦返事ヲスルト其レニ對シテ端書ノ挨拶モナイ、シカシ別ニ氣ニモ止メテ居ナカッタ所又半歲位タツト一包ヲ送り來ルスルコトガ度重ナル中私モ段々多忙ノ身ニナツタカラ一度返事ガ遅レタ所「何故速ニ回答セスカ地方ノ人ヲ教ヘルノハ専門家ノ義務デハナイカ」ト云フ手紙ガ來タ私モ流石ニ驚キ直ニ今後ノ鑑定ヲ謝絶スト言ヒ送ツタ、其後此『植物研究雜誌』ガ出初メタ時私ガ鑑定シテ居タモノニ二ツノ誤ガアルコトヲ指摘シテ居タ、一ツハ *Galium trichopetalum* ガやまむぐらト區別ガ出來ナイコト一ツハ *Cirsium Yoshinoi* ハやまあぢみト區別ガ出來ナイト云フコトデアッタ前者ハ吉野君第一回ノ送品ガ今尙ホ帝大理學部植物學教室ノ標本室ニ藏シテアルガ其二回以降ニ送り來ツタ、やまむぐらヨリモ花モ葉モ大キク且毛モ長ク大變異ナツタモノデアアルカラ吉野君ガ反問シテ來タ時ニ詳シク區別ヲ申シ送ツタケレドモ同君ハ第一回送品ノ如キヲ其後採リ得ズシテやまむぐらト同一デアルト斷定シテシマツタ様デアル、又 *Cirsium Yoshinoi* ハやまあぢみニ似テ居ルケレドモ毛ガナク十月乃至十一月ニ開花シ總苞ニ粘質ガアツテ直ニ區別ガ出來ル其種ハ其後中國、九州、濟州島ニ分布スルコトガ判ツタ同君ハ關東地方ニ産スルやまあぢみノ標本ヲモ見ズ獨リ極メデ同一トシテ居ル私カ

滿洲ノねぢあやめトゆすらうめ



(滿洲ニテ撮影)

野生セルねぢあやめ (*Iris ensata* THUNB. var. *chinensis* MAXIM.)

ラ言ヘバ始メカラ左様ニ思フナラ専門
家ヲ煩ハス必要ハ少シモナイノデア
ル、斯イフ不遜ナ人ハ單ナル天狗トシ
テ取扱フコトハ出来ナイ、牧野先生ナ
ドハ常ニ多クノ地方人ト交通シテ居ラ
ル、カラ定メシ多ク斯イフ場合ニ際會
シ困ツテ居ラレルコト、推察シマスガ
私等同人ハ其様ナ人ハ一蹴シテ今後如
何ナルコトアリトモ交通ハシナイ迄デ
アル、敢テ専門家ノ聲トシテ地方同好
者ノ御參考迄ニ一言シテ置ク次第デア
リマス

○滿洲ノねぢあやめト ゆすらうめ

理學士 大賀 一郎

○ねぢあやめ (馬蘭)

南滿洲ノあやめ科植物デ最モ早ク花ノ
咲クノハこあやめト稱セラル、一種デ